

つに色を替らせ、中庭の泉水には、當下はやりし鳥といへる金魚を放ち、這ところより樓上まで
梯木をかけ、その梯木二木づ、縞にくみたり、左右唐樹づくりの欄干、擬寶珠にいたるまで、残ら
ず縞のかたちにて造れり、中庭の北おもて、隣家の壁まで這方より縞にぬらせ、店頭の長暖簾はい
ふもさらなり、疊の縁までみな縞なりき、然ば島の勘十郎とて、當頃名だかき人なりしとぞ、平安
鹿角比豆流とかいへる人、東都馬琴翁へ書ておくられたる儘茲にしるす。

〔先哲叢談續編 十二〕西山拙齋

拙齋有愛石癖、自許以米顛、所藏數十百品、自命華岳匡廬之稱、謂貯置堂廡、描其戶壁、以南宮拜石圖、
無朝無暮、撫玩自娛、又有紫石英四五寸許、高八分五釐、濶一寸二分、厚六分、大如棗栗、映日瑩徹、中含
富岳真形、削成突兀、紫氣罩之、岳頂皎白、豆許若雪、光彩爍目、擊而瞰之、突如山峯、戴雪狀、珍重特至、不
番連城、名曰玉芙蓉、探勝訪人、不必離身、常在坐側、嘗遊平安、諸貴人傳聞其事、爭請撫覽、因遂經至尊
宸覽、既製匣藏之、自題蓋上、以天覽二字、斯事籍甚、聞於四方、至有刻石顛印而贈者、是亦一奇行矣。
〔名家略傳 四〕夜雨禪師

筑紫の山中にひとり禪師あり、名を越宗、字は蘭陵といひて、何れの所の人といふことを知ら
ず、特に夜雨を愛して、いつにても雨ふりける夜半毎に、香を焚き、靜坐して、曉までも睡りにつく
ことなし、かゝれば山村の人、はじめその名をしらざれば、たゞ何となく夜雨和尚とぞ呼ける。
○按ズルニ、詩歌音樂ヲ嗜ミ、飲食器財動物植物等ヲ好ム者ノ事ハ、文學樂舞食物器用動物植
物等ノ各部ニ載ス、其他類推スベシ。

性癖

〔倭訓栞 前編 八〕くせ 癖疾をいへり、毛病も同じ、字書に癖は嗜好之病といへり、晉書に王濟有馬

癖、和嶠有錢癖、杜預有左傳癖、又王福時譽兒癖、黃魯直香癖、李涉竹癖と見えたり、或はくせ事、くせ
ものなどに、曲をよめり、諺に人に一癖といへり、慈鎮和尚の歌に、